HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「ひきこもり」についての理解と支援の新たなる枠組みをめぐって ： 心理 - 社会的な視点からの探求［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	村澤, 和多里
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7024号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/66145
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Watari_Murasawa_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士（教育学）　村澤 和多里

学 位 論 文 題 名

「ひきこもり」についての理解と支援の新たなる枠組みをめぐって

―心理-社会的な視点からの探求―

学位論文内容の要旨

本論文の目的は、1990 年代後半から日本で注目されるようになった「ひきこもり」という現象について、臨床心理学的視点と社会・歴史的視点を架橋しつつ理解と支援の枠組みを提示することである。これまで「ひきこもり」についての公的な理解と支援の枠組みは、厚生労働省によって精神保健医療（メンタルヘルス）の視点から示されてきた。しかし、「ひきこもり」は、ある時期に急速に姿を現し問題化されるようになった社会的現象であり、それを生み出す社会・歴史的な文脈を問うのでなければ本質的な解決の道筋を見出すことは困難なはずである。本論文では、このような視点から「ひきこもり」という現象が生み出された社会・歴史的な文脈について分析するとともに、ある個人にとって「ひきこもり」がどのような体験であるのか検討し、最後に個人と社会を結びつける支援の枠組みのあり方を提示した。

論文は 3 部から構成されている。第 1 部では「ひきこもり」という現象について、第 2 部では支援枠組みについて検討した。そして、第 3 部ではそれまでの議論を総括し、本論文の目的である新たな理解枠組みと支援枠組みとを提示した。

まず序では、本論文の目的と方法を述べ、若者自立支援施設および精神科クリニックにおいて筆者が行った支援と調査の概要を説明した。第 1 章では、「心の問題」としての「ひきこもり」の概念を捉えるために、ひきこもりとの関連が指摘されている精神保健医療的概念について検討し、論点として「回避的なシステムの形成」、「不安・恐怖の質的な変化」、「リスク管理の方略としての自己愛」を見出した。

第 2 章では、「ひきこもり」が問題化されていく社会・歴史的文脈を捉えることを目的とし、先行する現象概念である「不登校」との関係を中心に検討した。その結果、もともとの「ひきこもり」という現象は、中学校を中心にした「いじめ」やそれを背景にして増加した不登校などについて、効果的な対応ができないまま問題が先送りされて生じてきた現象であった。しかし、その後、不登校という現象から切り離され、社会参加に関連する独立した概念として確立されていったことを確認した。また、その後、この概念を採用した厚生労働省による疫学的研究が進展していく中で、個人の精神保健医療的側面を重視する方向へと展開していったことを述べた。

第 3 章では、調査対象者らがひきこもりに至るまでの経緯について検討し、第 2 章で論じた「不登校」「いじめ被害」との関連性について考察した。その結果、それらの体験が直線的にひきこもりの原因となっている訳ではなく、相互に絡み合うように作用しながらひきこもりという状態へと陥っていくことが確認された。また、彼らは、支援を受ける過程で、人と関わらないですむような進路選択を促される場合も多く、その結果、実質的にはひきこもり状態にありながら表面的には学校に在籍しているという形で、ひきこもり状態にあることが見えなくなってしまう「透明な排除」の過程があることを指摘した。

第 4 章では、第 3 章のような経緯でひきこもり状態に至った若者たちが、その状態から抜け出せなくなってしまう心理的メカニズムについて検討するために、調査対象者らの語りの内容を質的研究法

（M−GTA）を用いて分析した。その結果、劣等感にとらわれて過剰な自己コントロールに陥っていく「スティグマ化」のプロセス、過去の傷つき体験（トラウマ）とそれがなかったら実現できたかもしれない空想的な自己像にとらわれていく「トラウマ化」のプロセスが見出され、これらの悪循環が絡み合いながら進行して、ひきこもり状態から抜け出せなくなっていることを指摘した。

第 5 章では、第 4 章で指摘した「スティグマ化」「トラウマ化」から脱却していくプロセスを明らかにするために、筆者が心理カウンセリングを行ったひきこもりの若者の 2 事例を検討した。彼らは共に、「スティグマ化」「トラウマ化」によって、自己の「異質性」をむき出しのまま体験させられるために生活世界の自明性を構築できなくなっているような状態であったと考えられ、それを「社会的自明性の喪失」と呼んだ。そこから回復していく過程においては、他者との相補的な関係性を通して新たな自己が生成していくプロセスが確認され、Merleau-Ponty,M.や Wallon,H.の自我形成論を参考に考察した。

第 6 章では、第 5 章で検討した相補的な関係性を通した自己生成のプロセスについて深く検討するために、ひきこもりの支援において中核的な役割を果たしている「居場所」プログラムの活動を分析した。分析において Bakhtin,M.M.の対話理論を参考に検討し、その結果、同じ体験をした者だけがわかる暗号を交換しあう「腹話術」と呼べる発話形式が、彼らの「同質性」の体験を活性化させていき、その中で「待つ−待たれる」といった相補的な関係性が体験され、彼らにとって忌まわしき属性である「異質性」が、「個性」として受け入れられていくことが見出された。

第 7 章では、ひきこもりを中心に若者支援の政策的枠組みについて概観し、それらが新自由主義化の進行に伴う社会不安を解消することに偏ってきており、社会適応のための訓練を重視する傾向が色濃くなってきていることを指摘した。

終章では、これまでの議論を総合的に考察し、「ひきこもり」という現象についての新たな理解枠組みと支援枠組みを提示した。「ひきこもり」という現象は、個人の心理的な問題に還元できるものではないにもかかわらず、発達障害や家庭の問題などのさまざまなリスクを抱える個人が「不登校」「いじめ被害」「就労の失敗」といった社会的体験をくぐり抜ける中で、自己完結的なリスク管理システムを形成していくプロセスであると理解することができた。1990 年代以降、不登校の生徒への学習を補償する制度が整備されていったが、この制度の整備は一部の者にとっては、「人と交わらずに社会（学校）に参加（在籍）すること」を可能にするシステムとして、不登校からひきこもりへと導入するルートとして機能してしまった。また、個人が対人的リスクのコントロールを過剰に強いられるようになった背景としては、「包摂型社会」から「排除型社会」（Young,J.）への移行に伴って個人のリスクが表面化していくとともに、それに対する自己管理が過剰に強いられるようになっていったことを指摘した。

回復していく上での鍵となるのは、自身の異質性（リスク）を過剰にコントロールしようとする「スティグマ化」「トラウマ化」という心理的プロセスから脱却し、他者との相補的な「役割交代模倣」のような関係性を（再）構築していくことであった。これからの支援の枠組みとしては、相補性の原理に基づく「居場所」の創出や、個人のリスクを共同的に管理する「『自己コントロール』の社会化」、支援者や当事者が相互に支え合う関係である「親密性のセーフティネット」を構築していくことこそが、重要であると論じた。

今後の課題としては、若年者就労問題との関係、グローバル化の文脈の中で「ひきこもり」現象を検討することが残された。